Institute of Human Culture Studies Otsuma Women's University
Newsletter

No. 6
2017

CONTENTS

「人間」についての研究の進む道 …… 1
協賛企業 …… 1
人間生活文化研究所「特別研究員」 …… 2
電子書籍「Otsuma eBook」 …… 3
若い研究者の方へ「科研費申請からはじめる研究のPDCA」 …… 4
競争的外部資金の獲得支援事業 …… 4
科研費採択課題を紹介します …… 4
人間生活文化研究所 研究費助成事業 …… 8

〈大妻女子大学人間生活文化研究所〉

「人間」についての研究の進む道

「人間生活文化研究所」の事業には、大学院生研究助成も含まれる。機関紙「人間生活文化研究」には修士課程修了者全員の修士論文概要が掲載され、別に大学院研究員として活動する者もいる。教員に加え、大学院生も、今やその学修・研究の推進について、当研究所は極めて重要な役割を担っている。

当研究所と大学院で「人間文化研究」を称することは、研究の領域が重なることを意味する。現在大学院は、1研究科に人間生活科学・言語文化学・現代社会研究・臨床心理学の4専攻が属し、年間2度の修士論文についての発表会では、4専攻での全修士論文の研究内容概略が示される。1研究科とは言え、細分化された専門分野は、発表内容の世界があまりに違い過ぎないかとの危惧が先行する。しかし、肉体と精神、個人と社会という、命ある人間に関わって多岐に分かれた研究だと大きく括ることのできることに気づかされる。つまり、大学院も当研究所も人間に関わる多面的・総合的研究機関なのだということである。

それでは、それらが進む道筋は各専攻でそれぞれ別ということなのか。鷲田清一は、次のような言葉を示す。「私どもは、学校を知的修練の売り場とは決して考えなかった……修練を積めば生活費が稼げるようになるとの目的で、学校に行かされたのではなく、真の人間になるためだった」(内村鑑三著「代表的日本人」より、朝日新聞5月10日「折々のことば」)。

同書には、「文化や教養は、それだけを目的にしてはならない。すべての学問の目的は徳を修めることに通じている」ともある。「徳」は「善」でも良いだろうか。あまりに単純で曖昧、どのようにも利用され得る偏った結論とも見える。しかし、やはり、ここにこそ真があり、我々はこの真をこそゆるがせにせず、求めなくてはならないように思う。

大妻女子大学
大学院人間文化研究科長
柏木　由夫

協賛企業

人間生活文化研究所の事業は、多くの企業の皆様からご支援いただいています。

前田建設工業株式会社
鹿島建設株式会社
清水建設株式会社
ダイダン株式会社
株式会社三井住友銀行
株式会社九電工
山崎製パン株式会社
株式会社オンワードホールディングス
三菱地所株式会社
株式会社岡村製作所
富士ゼロックス株式会社
株式会社三越伊勢丹プロパティ・デザイン
キユーピー株式会社
東京ケータリング株式会社
株式会社内田洋行
SMBC日興証券株式会社
株式会社中村屋

（順不同、2017年9月15日現在）

人間生活文化研究所「特別研究員」

当研究所の「特別研究員」制度は、平成28年度に新設されました。
特に優れた研究業績を有し、今後とも卓越した成果を出すことが期待される方を対象としています。
ここでは、今年度新たに特別研究員となった３名の方をご紹介します。

研究課題

「輝く女性」フォーラム

花村　邦昭
大妻学院　顧問
前大妻学院　理事長
前大妻女子大学　学長

昭和32年（1957年）に大学を卒業して住友銀行（現在は、三井住友銀行）に入行、人事畑で約20年を過ごし、様々な業務を経て、26年前（1991年）（株）日本総合研究所の設立に伴いその初代社長に就任、大妻学院での勤務は本年をもって満10年、８年間の理事長任期をこのほど無事に終えることができました。サラリーマン生活満60年の“還暦”です。

いま「女性が輝く時代」「男女共同参画社会」が提唱されていますが、世間ではこれを「管理職中に占める女性比率」という問題に矮小化して受け取っているように思えます。根源に立ち返って、「女性が輝くとはどういうことか」、「男女が性別に関わらずそれぞれ所を得て十全にその特性を発揮でき、それが適正に評価されるにはこれまでの組織運営や業務管理体制はいかにあるべきか」というレベルで真剣に論議されているようには見受けられません。問題は、これからの「組織文化」はどう変革されるべきかを企業自身が自問することにこそあるにも拘わらずです。

このほど、私が「人間生活文化研究所」の一特別研究員として“輝く女性フォーラム”を立ち上げましたのは、あちこちで現に「輝いている女性」を募って、企業サイドからそのための方略を研究してみようと思い立ったからです。いまのところ、学外のメンバー10名程度（女性のみ）でスタートする予定ですが、研究会を月１・２回開催するなかで１年後には何らか成果を世に問えればと思っています。この問題にご関心をお持ちの方（女性に限る）のご参加を期待いたしております。

研究課題

日英語の感情表現に関わる発話モダリティのメカニズム

河野　武
大妻女子大学　名誉教授

1970年に国際基督教大学大学院教育学研究科修士課程を修了。生成文法から言語学に入門した。ことばを丸ごと捉えるためには、ことばそのものの仕組みとことばのコミュニケーションにおける機能に目を配らなければならない。また、ことばの意味表示や理解には認知との対応づけが必要になる。このように、ことばの現象は言語学、語用論、認知科学から光を当てることで全体像が立ち現れてくる。

私のスタンスは言語学にベースをおいた語用論である。文法規則（統語・形態・意味・音韻）によって組み立てられた「文」が具体的なコミュニケーションの場面でどのように「発話」として用いられるかが私の関心である。発話は、情報内容を単に過不足無く客観的に伝えれば良いというものではなく、情報内容が実を伴い、また表現効果も高くなるようにデザインされなければならない。ここには話し手が大きく関与し、主観的な発話態度がモダリティとして表される。

多様なモダリティは、一定の語彙、構文、イントネーション等を通して表出される。特に、話し手が発話の「関連性」の高さ（情報価値が高く壷にはまっていること）を判断する「関連性モダリティ」は発話に広く関与する。日本語の終助詞や英語の付加疑問文・分裂文（強調構文）・倒置文等はその現れである。また、イントネーションは関連性モダリティの持つ＜主張＞と＜質問＞のモードをそれぞれ下降調と上昇調で表し分け、文脈と相互作用して繊細な表情を描き出す。

研究の流れの中で、今行き着いたのが日英語の間投詞・感嘆文等の感情表現に介在する発話モダリティである。しばらくは「ことばと感情」にこだわりたい。

研究課題

IoT（Internet of Things）時代の地理空間情報技術の調査･研究

東明　佐久良
大妻女子大学　名誉教授

1967年に東京大学工学部計数工学科を卒業。同年、東京ガス（株）に入社し、情報システム部において「地理空間情報と多くの異種情報に対する階層化データベースシステムおよび地理空間情報技術」の研究･開発を行い、同社30,000枚の導管図面、画像情報を階層化データベースに登録するとともに、ネットワーク解析等の各種アプリケーションを開発し、建設省の道路管理システム（東京ならびに10政令指定都市の道路上のガス、水道、下水、電話、電気の地理・画像情報をコンピュータ管理するシステム）に上記研究成果を具体的に適用し実施した。1993年に東京大学において（博士）工学を取得した。2001年より大妻女子大学社会情報学部社会情報処理学専攻に教授として着任し、2007～2010年まで、社会情報処理学専攻主任を、2010～2014年まで社会情報学部長を歴任した。2015年より大妻学院評議員をさせていただいている。学外では、地理情報システム学会（理事）、GITA（Geospatial Information Technology Association）-Japan（会長）、ISO TC211（地理情報システム標準化）国内委員会委員として、GISの教育･普及、標準化などに取り組んできている。地理空間情報技術は、センサー技術の進歩、ロボットの高度化、AIの深化、準天頂による高精度位置情報の取得などの技術の進展および、それに伴うデジタル地図の３次元化、高精度化により、今後さらに高度化し、実空間とインターネット上のデジタル空間との時空間距離がますます縮まっていくと考えられる。今後の、IoT（Internet of Things）時代においては、地図上でタグ化された人、もの、機械、ロボットこれらが、地理空間上で相互に接続されていくが、これらの形態、人間社会に及ぼす影響などについて調査研究していきたいと考えている。

電子書籍「Otsuma eBook」

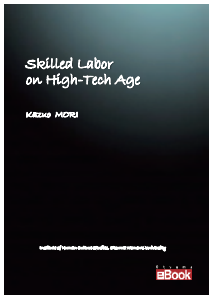
人間生活文化研究所では、電子書籍の出版を行っています。電子書籍ならパソコン、タブレット、スマートフォン等にダウンロードして、いつでもどこでも手軽に読むことができ、本棚のスペースをとらず、色あせることもありません。

また、印刷・製本・輸送費など、出版にかかる費用を大幅に削減することができます。欠品・絶版になるリスクもありません。出版された書籍にはISBNが付与され、ウェブサイト「Otsuma eBook」より世界中に発信されます。

Otsuma eBook **Recommended Titles** ≫ http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/ebook/

『Skilled Labor on High-Tech Age』

著者　森　和夫



著者のことば

現代社会は技術革新のまっただ中にあり、技能者はあたかもその道しるべを失ってしまったかのように思える。その理由の一つは、巨大な生産機械やシステムによって、時に技能労働が見えなくなり、技能労働の意味が分からなくなっていることによる。果たして技能労働は本来の姿を失ってしまったのだろうか。本書はこの素朴な疑問に対する回答を示そうと意図した。『ハイテク時代の技能労働ー生産技能の変化と教育訓練ー』（1995、中央職業能力開発協会）の英語版（1997、職業能力開発大学校指導学科）に加筆修正を加えたもの。

発　行:2017年7月18日
形　式:PDF
ISBN:978-4-907136-17-8

技術･技能教育研究所
代表取締役
森　和夫

若い研究者の方へ「科研費申請からはじめる研究のPDCA」

大学教員の多くは、まずは研究者を目指し、大学院でもっぱら専門の研究に没頭し、研究業績を蓄積して、大学に就職されたことと思います。しかし日常の多忙に慣れてくるといつしか研究への情熱が冷めてしまうかもしれません。一方、教員としての業績審査となると研究者としての実績の審査が最優先されるのが現実です。

そこで、まずは科研費に申請する事を薦めます。タイトルを練り、目的、研究計画、共同研究者、経費、研究業績、研究成果の社会への還元などの項を一つずつ考え、書き進むと、徐々に自分の研究の全体像が見えてきます。記入方法が心配なときには人間生活文化研究所に聞いてください。提出した半年後の４月初旬には審査結果の連絡が入ります。採択されたときの嬉しさは格別で、自分の研究構想が公的に社会的に認知されたという充実感に満たされるでしょう。やがて、研究費の心配をすることなく、実験や調査、測定、出張、発表などの研究活動をすることができます。

1年ごとに科研費による報告をすることも必要です、自分の研究活動のチェックをするよい機会です。修正点も見えてきます。次年度に向けてさらに充実した年間計画をつくります。こうした研究活動が期限を迎える1年前くらいになると、次の科研費申請準備が始まります。科研費の申請そのものが研究者人生の主軸になってきます。幸いにも本学には科研費申請にそっくりの学内の戦略的個人研究費という道場も用意されていますので、未経験の方はまずはここで小手調べをしてください。

どうぞ若い研究者の方がたには、科研費申請（P）、研究活動（D）、報告・発表（C）、次期科研費への研究計画の修正と開発（A）のサイクルを回し続ける事を薦めます。

大学としてもあなたの研究が大学のブランディングに不可欠のファクターだと考えています。

大妻女子大学　副学長
人間生活文化研究所　所長
大妻学院　理事
大澤　清二

競争的外部資金の獲得支援事業

6月29日に臨時開催された科研塾
「科研費改革2018速報」。参加者は53名。

■科研費申請講座「科研塾」

文部科学省が行う科学研究費助成事業の改革（科研費改革）の一環として、平成30年度公募（平成29年秋実施）より、新たな審査区分及び審査方式により公募・審査が実施される見込みです。人間生活文化研究所では、文科省の科研費改革説明会をうけ、臨時の科研塾を開催。改革の内容をいち速く伝えました。また、7月28日には、平成29年度第2回科研塾を開催。あわせて研究計画調書作成のポイントについてガイダンスを行いました。

当研究所では、**申請内容に関する相談や、専門家による申請書類の添削を随時受け付けています！！**下記「問い合わせ先」にご連絡ください。

問い合わせ先　03-5275-6047（千代田キャンパス内線5650）info@o-ihcs.com

日本学術振興会科研費HP ≫ http://www.jsps.go.jp/

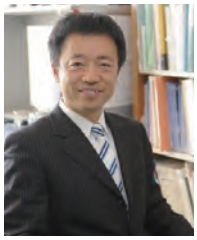
平成30年度公募からは新たな応募書類（研究計画調書）を使用することになります。詳しくは、上記HPにて公募要領を確認してください。

科研費採択課題を紹介します

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、ピア・レビューによる審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものです。（日本学術振興会ホームページより）　平成29年度、**本学では、新規採択課題13件を含む、全48件が採択されました！！**　5ページより、新規採択課題1件と、継続課題5件の研究内容や成果についてご紹介します。

＜新規＞研究課題

スーパーヴァイザー養成のためのメタ･スーパーヴィジョンに関する研究



研究代表者　福島　哲夫
所属　人間関係学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H29-H31

今回採択された上記の研究は、私がこれまで取得してきた「言語機能分析を用いた心理療法の効果研究」（基盤研究C H23～H25）、「初心者および中級者への継続的スーパーヴィジョンの効果とプロセスに関する実証的研究」（基盤研究C H26～H28）という二つの研究の成果を踏まえたものです。

H23～H25の研究により、より効果的な心理療法のあり方を学派横断的に探り、その成果を元にH26～H28の研究では、心理療法のトレーニングに欠かせないスーパーヴィジョン（個別臨床指導）のプロセスの中で、初心者および中級セラピストはどのような経験をしているのかを、インタビュー調査･質問紙調査および実際のスーパーヴィジョン場面の動画分析によって明らかにしたものです。

これまで心理療法の効果という、日本ではまだまだ未発達ながら不可欠な研究領域を手がけてきましたが、この研究からさらに平行して「効果の高い心理療法を実施できるセラピストを育てるにはどうしたらいいのか」という問題にも取り組んでいます。そして、今回はさらに「より良い指導者を継続的に養成していくためにはどのような工夫が必要か」という課題に関して、取り組む必要があると考えて申請しました。心理療法というとても微妙で複雑な営みをどのように遂行するべきかという大きな一連の課題の一部となる研究です。

臨床心理士というこれまでの民間資格に加えて、公認心理師という新たな国家資格が生まれたこの時期に、必須の研究といえます。これまで数件の学内共同研究プロジェクト、戦略的個人研究費による研究が、今回の採択につながったことを追記させていただきます。

研究課題

中高年女性の健康力と若年期の食生活･生活習慣に関する縦断研究

研究代表者　上杉　宰世
所属　家政学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H25-H29

女子教育を100年以上継承している本学の中で、当研究室では家政学部創設とほぼ同時期の昭和43年から食物系学生の栄養士、管理栄養士養成教育として身体アセスメントを実施しています。食事摂取状況調査、生活活動調査のほか、その時代ごとに女子大生が抱えている健康問題に焦点を当てた付帯質問とともに約50年間継続して実施し、その都度論文等にて女子大生の現状について報告してきました。これらから得られた資料は、本学学生の食生活や身体状況、活動強度および活動内容の変遷を知るものとして大変貴重であり、この資料を受け継ぎ、活かすことは、卒業生として本学に25年勤務してきた者の使命であると考えておりました。

一方、女性は、卒業後の人生の中で結婚、出産や生活環境に伴って食生活や健康状態も変化しますが、大学時代に健康教育を受けてきた女性は、良好な健康状態を保ち、QOLの高い生活を送ることができているのかを知ることは栄養士、管理栄養士を養成する上で重要なことです。この科研では、卒業後30～35年を経た本学の卒業生を対象として、健康状態、食事摂取状況、健康度等の調査を実施し、学生時代の身体アセスメント状況とともに解析することで、若年期の食生活や身体活動が中高年になった時の健康状態にどのように影響するかを検討することを目的としてこの縦断研究を進めました。この研究によって明らかにされた結果は、若年女性への健康教育や生活指導、および大学の卒後教育、地域住民への講座等に活用することができると考えております。

研究課題

ガバナンスのリスク社会論･監査社会論的研究――資本主義と民主主義の現代的変容

研究代表者　正村　俊之
所属　社会情報学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H27-H29

近代社会は、政治･経済･教育･科学といった社会的諸機能が分化した社会であり、私たちが「民主主義」や「資本主義」として理解している仕組みは、近代社会のなかで機能分化した政治システムや経済システムを表している。機能分化の構造は19世紀の西欧社会で確立されたが、日本も明治以降、近代社会の仕組みを取り入れてきた。しかし1980年代以降、情報化、グローバル化、そして規制緩和と民営化を柱にした新自由主義的改革の進展に伴って、近代社会の構造は、世界的に変容しつつある。

このような問題意識のもとに、本研究はガバナンスとリスクをキイワードにして、現代社会の構造的変化を分析することを企図している。政治的には、「ガバメントからガバナンスへ」と呼ばれる統治様式の変化が進行しており、国家が公共政策を一手に引き受けるガバメントから、国家･企業･NPOといった複数の主体が公共政策の遂行を担うガバナンスへと移行してきた。また経済的には、財務リスクの管理から始まった企業のリスク管理は、今では企業の統治原理に高められただけでなく、行政組織や教育組織の統治原理として非経済的領域にまで浸透してきている。こうした政治的･経済的な領域で起こっている現象が機能分化の仕組みにどのような影響を与えているのかを解明することが本研究のねらいである。

本年度は最終年度であるが、すでに研究成果を纏める作業は終わっており、今年度中に『ガバナンスとリスクの社会理論』(編著　勁草書房)、および『デモクラシーの危機―自己組織化のゆくえ（仮題）』(単著)を刊行する予定である。

研究課題

移行期における次世代自動車の開発と普及のための税制と規格, 規制の理論･実証分析

研究代表者　荒川　潔
所属　社会情報学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H27-H29

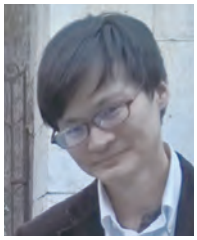
近年、地球温暖化や石油資源の枯渇への危惧などから、世界的に次世代自動車の普及が課題となっています。次世代自動車の移行期である現在、日本ではハイブリッド車の普及が進んでいますが、排ガス量が小さいプラグイン・ハイブリッド車や電気自動車（EV）の普及率は依然として低い水準です。次世代自動車を取り巻く環境は大きく変化する移行期であり、次世代自動車の開発と普及の促進に適した新しい税制と規制の構築が求められています。本研究では、そのような移行期に対応した基礎的な経済理論の構築と、税制･規制の経済効果の実証的計測を目的としています。

現段階の研究成果は以下の通りです。まず、EVの効果的な普及に関しては、充電インフラ整備を先行することで、企業間のEV開発競争を促すことが可能となることを明らかにしました。また、バッテリー容量に応じて補助金額を定めることで、航続距離の長いEVの普及が進み、それに伴う排ガス低下よって社会厚生が改善することを明らかにしました。次に、効果的なイノベーションのための税制と規制については、市場規模が小さい場合と大きい場合は税制による政策が望ましく、それ以外の場合は規制が効果的であることを明らかにしました。つまり、EVの効果的な開発と普及には、排ガス規制よりも補助金などのインセンティブが効果的であるということです。

現在は、次世代自動車の普及に関する税制や規制の効果についての詳細な実証分析と、次世代自動車の普及政策と移行経路の有効性の実証的な解明に取り組んでいます。

研究課題

ラテン語詩と近世初期日本の交差



研究代表者　渡邉　顕彦
所属　比較文化学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H27-H29

織豊時代から江戸初期の日本では古典ラテン語詩が、作詩法も含めて教えられていました。また同時代のヨーロッパでも、日本を題材にした擬古典ラテン語詩や（古典的な区分では韻文に含まれる）演劇が大量に作成され、残存しています。

このこと自体は少数ではありますが既存研究により知られています。しかし日本人が学び書いたラテン語詩、およびヨーロッパ人が日本について書いた同様の作品群は、未だ作成された当時の文脈の中できちんと検討されているとは言い難いです。対象作品自体、学問的に校訂されたものは極一部にとどまり数世紀を遡る刊行本や写本にのみ現存するテクストが大多数です。また上記文脈の重要な一部である、近世初期のラテン語文学（英：Neo-Latin、独：Neulatein）自体が、欧米を中心に現在進行形で開拓されつつある研究分野です。当研究では写本や近世初期の刊行本を基に対象テクストの一部を校訂しつつ、その文脈も併せて調査研究し、国内外の学界に発信しています。

2000年ほど前の紀元前後、地中海地域で開発整備された古典ラテン語詩の技法が近世ヨーロッパに受け継がれて社会的指導層の教育やアイデンティティー形成に活用され、日本とヨーロッパの文化交流史にまで入り込んでいるというのは興味深い現象です。韻律の評価から始まり、語句、テーマ、ジャンルや作家の受容まで視野に入れて、ラテン語作詩というこの極めてヨーロッパ的な伝統が近世初期のヨーロッパと日本の出会いでどのような役割を果たしたのか、調査研究しています。

研究課題

日中戦争の記憶と表象に関する総合的研究――1940-1960年代を中心に

研究代表者　五味渕　典嗣
所属　文学部
種目　挑戦的萌芽研究
研究期間　H27-H29

20世紀の日中戦争は、英語では“Second Sino-Japanese war”と表記します。「第一次」として日清戦争（1894-95）があるからです。しかし日本社会は、50年間に二度起こった中国と日本の戦争を、連続的に捉える視点を持っているでしょうか。いまでも毎年８月になると、〈戦争の悲惨さ〉を訴える映画やテレビ番組が多く制作され、硫黄島や沖縄を含む太平洋の激しい戦闘と、広島・長崎の核の被害が問題にされます。しかし、1937年から数えても８年間続いた中国大陸での戦争について、この社会は何を知っているでしょうか？

この研究では、文学や映画だけではなく、一般の兵士や市民の従軍記・戦争体験記などの資料も取り上げながら、戦時・戦後の日本社会において、中国大陸での戦争がいかに表象・表現されたかを検証しています。現在は、とくに東京裁判報道に注目、占領軍関係資料なども参照しながら、戦後初期の日中戦争観を明らかにすべく、調査と分析を進めています。

最初に挙げた例が示す通り、わたしたちの歴史認識は、言語やイメージによる語られ方に大きく依存しています。植民地や占領地を含め、まぎれもなく〈帝国の戦争〉としてあった日中戦争・アジア太平洋戦争の何が語られ、何が語られてこなかったか。それらを改めて見つめ直すことは、1990年代以降最悪とも言える、現在の東アジアをめぐる緊張を解きほぐしていくための重要な一歩につながると考えています。

なお、本研究は、2014年度大妻女子大学戦略的個人研究費研究課題「日中戦争の記憶と表象に関する総合的研究」（S2618）の延長線上に構想・着手されたものであることを、謝意とともに申し添えます。

人間生活文化研究所　研究費助成事業

■ 大学院生研究助成

大学院生研究助成

本学大学院の教育・研究を高度化、活性化することを目的とする助成制度です。この制度は、本研究所の協賛企業からの賛助金により運営されています。平成28年度より、奨学金のように採択額が一括で支給されるようになりました。

平成29年度 大学院生研究助成（A） 採択課題（9件）　対象：人間文化研究科　博士後期課程在籍者

氏　名	所　属	研究課題
飯田　さやか	言語文化学専攻	古今和歌集注釈書における竹取説話
伊藤　陽子	人間生活科学専攻	健康寿命延伸のための高齢者サポートの検討 ―地域における管理栄養士の役割
佐藤　祐子	人間生活科学専攻	病院管理栄養士の栄養相談スキル評価方法の検討
鹿野　美由紀	言語文化学専攻	王朝文学に見る裳唐衣装束について
杉山　眞弓	言語文化学専攻	19世紀後半のアメリカの女性文学にみる女性の仕事観 ―自己実現のための仕事と家庭
福島　あずさ	人間生活科学専攻	玄米食者の腸内細菌に関する革新的研究
峰岸　里衣	言語文化学専攻	王朝文学から見る平安期蔵人所の研究
山中　千恵美	人間生活科学専攻	ミセル性リン酸カルシウムがマウスの耐糖能改善に及ぼす影響
渡邊　万里子	言語文化学専攻	EFL環境における英語教室内インタラクションの意義と可能性

平成29年度 大学院生研究助成（B） 採択課題（37件）　対象：人間文化研究科　修士課程在籍者

氏　名	所　属	研究課題
朝倉　由衣	現代社会研究専攻	精神保健福祉士実習における実習プログラムと評価項目の開発
石原　果奈	言語文化学専攻	リーディング・ストラテジーと読解の関連性
植田　桜	人間生活科学専攻	暑熱環境下における浴衣の着装
上田　ひかり	言語文化学専攻	平安文学における僧社会の性差
大塚　由佳	言語文化学専攻	『古今和歌集』の聴覚表現 ―鳥・虫・獣の音―
大屋　理香	人間生活科学専攻	幼児の造形における道具を使う技術と表現について
霞　麻紗子	臨床心理学専攻	青年期女子の過剰適応を規定する親子関係の諸要因について
加藤　花苗	人間生活科学専攻	裁縫教科書に見られる長着の変遷
金井　正美	臨床心理学専攻	コンパニオン・アニマルとしてのイヌが人々に与える心理的・社会的影響
上坂　緑	臨床心理学専攻	一般臨床群における心理相談室への被援助中断に関する探索的研究
神沢　美波	臨床心理学専攻	妊娠期～出産後における女性の心理的変化と心理的サポートについて
川久保　愛美	人間生活科学専攻	小胞体ストレスがインスリン分泌に与える影響：小胞体カルシウムを観る
栗山　恵弥	人間生活科学専攻	ショウガオールが骨格筋細胞の代謝および運動機能に与える影響
纐纈　琴音	人間生活科学専攻	ユーグレナの機能性に関する評価
神山　ルリ乃	臨床心理学専攻	成人型アトピー性皮膚炎が愛着スタイルに及ぼす影響
齋藤　日向子	臨床心理学専攻	摂食障害傾向とアサーションおよび自尊感情との関連
芝　すみれ	言語文化学専攻	第二言語習得で生じる学習意欲の変化とその動機
鈴木　優理子	人間生活科学専攻	LC-MS/MSを用いた食品中に含まれるD-アミノ酸の分析
関　容子	人間生活科学専攻	保護者はどのように保育施設を選択しているのか
髙尾　和泉	言語文化学専攻	中国社会における報道統制問題
竹下　亜美	臨床心理学専攻	スーパーヴィジョンにおける情緒的サポートに関する研究 ―セラピストの共感疲労の視点から―
田中　有沙	臨床心理学専攻	女性同性愛者のアイデンティティ形成について ―異性愛主義の影響から―
田向　優	臨床心理学専攻	中学生の部活動におけるバーンアウトの構造の検討
栃木　美冴	現代社会研究専攻	日本社会における難民の受け入れに関する研究
中澤　沙希	人間生活科学専攻	若年女性の食後高血糖に関する検討
萩原　千晴	人間生活科学専攻	若年女性の骨格筋を標的にした時間栄養学、時間運動学の応用
原島　伶奈	現代社会研究専攻	避妊に関する女性の自己決定のあり方について ―低用量ピルの普及状況の分析から―
原田　奏江	臨床心理学専攻	青年後期女性のキレる現象について ―自己愛的脆弱性と自己対象体験の観点から―
藤田　歩美	臨床心理学専攻	カウンセラーの介入の違いが反芻・省察思考に及ぼす影響に関する研究
不破　未貴	人間生活科学専攻	大麦品種BARLEYmaxの摂取が食餌性肥満モデルマウスの腸内環境に及ぼす影響
松ヶ瀬　美歩	人間生活科学専攻	テキストマイニングによるスーツの捉え方の変遷
松下　千原	人間生活科学専攻	和服着用時の動作からみた働態学的研究
宗近　水穂	言語文化学専攻	明治知識人の東西文化理解と漢字使用 ―明治初期の漢字・漢語を例に―
村上　奈帆	言語文化学専攻	黄表紙の中の天帝
森　由香子	人間生活科学専攻	間質性膀胱炎患者の教育ツール妥当性に関する検討
山口　千晴	臨床心理学専攻	代表的パーソナリティ障害の独自性とオーバーラップの背景要因の検討
山﨑　萌子	言語文化学専攻	平安貴族女性の裳唐衣衣装

大妻女子大学人間生活文化研究所
〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地
大妻女子大学千代田キャンパス図書館棟6階
Tel: 03-5275-6047　Fax: 03-3222-1928　E-mail: info@o-ihcs.com
HP : http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/

▶ ニューズレターの最新号およびバックナンバーはホームページよりご覧いただけます。

※ このニューズレターは、全国の大学・大学院、企業研究所、研究助成団体、官公庁などの関係機関に、およそ1,900部発送し、配付しています。